4　レイジードッグワイナリー

・ 調査日　平成 28 年 11 月 12 日（土）
・ 調査先　レイジードッグワイナリー
　　（ニュージーランド・クィーンズタウン）
・ 説明者　オーナー
　　ダイアナ・ハーカー（Diana Harker）
　　共同ワイン畑オーナー
　　クリス・ヒル（Chris Hill）

深澤　陽一

1　ニュージーランドのワイン生産について

1819 年にイギリス人がニュージーランドで初めてブドウの木を植えたことが今日のワイン生産の始まりではあるが、当初はワインを生産するために植えられたものではなく、教会での聖餐式（せいさんしき）の際にワインを使うためにニュージーランド国内でワインの生産が行われるようになったようである。

その後、第２次世界大戦後、急速に国内用のワイン生産が盛んになった。

1973 年に、ソービニョンブラン種を初めてニュージーランドで栽培し、これがニュージーランドのワインを世界的に有名にしたきっかけである。1990 年にニュージーランドとオーストラリアが輸出入自由化（経済協定）を開始したため、更に輸出量は増え、年間およそ 24%の輸出額の伸びが見られる。

現在、輸出先の１位はアメリカ、２位イギリス、３位オーストラリアとなっているが、特にアメリカ、イギリスはボトルだけでなく樽で購入してくれることが特徴で、最近の急成長の原因となっている。

筆者とオーナーのダイアナ・ハーカー氏

ニュージーランドワインは世界のワインの生産量の５％であるが、（１リットル当たりの？）収益率は世界一だと言われている。（正確な数字はないが）外国資本から注目されていることは確かであるとのこと。

2　レイジードッグワイナリーについて

ホームページには、レイジードッグワイナリーのオーナーであるダイアナ家族が80年代半ばに羊牧場にブドウを植えたのがワイナリーを始めるきっかけとなったというように書かれている。

今回のヒアリングでは、オーガニック農業への需要が高まってきたこと（除草剤を使用するため、100％オーガニックではない）、地球温暖化の考え方の中で、物流による二酸化炭素排出を伴わない地産地消の考え方が大きくなってきたことがあり、2003 年にこの地域（セントラルオタゴ）で観光産業も兼ねたワイン生産に注目したとの説明であった。

ワイン生産の過程では、共同経営者のクリス氏より専門的な生産方法についてアドバイスをもらい、マーケティングをダイアナ氏が担当した。

クリス氏もレイジードッグに協力するとともに、ロカバーンというピノノワール種のオリジナルワインを製造、販売しており、そのマーケティングをダイアナ氏に担ってもらっている。

通訳を通して説明を聞く団員

因みにクリス氏の経営において、生産されたブドウの 20％がオリジナルワイン、80％が大手ワイン製造会社に納めているが、オリジナルワインの売り上げの方が大手ワイン製造会社に納めている売り上げよりも大きく、ダイアナ氏はクリス氏にとっても重要なパートナーとなっている。ただし、オリジナルワインを 20％以上商品として販売するのはマーケティング上（経営戦略上）難しいとのことで、その売り上げを伸ばすことはできない。

3　マーケティングについて

ダイアナ氏がマーケティングの役割を担っているが、セントラルオタゴで自力でマーケティングを行って製造販売に取り組んでいたワイナリーがあったが、破綻してしまった事例があり、実際自分たちだけでマーケティングに取り組むのは難しい。

セントラルオタゴにはワイン製造者組合があり、そこが地域のワインのマーケティングを行い、またその組合員が一緒に勉強し、トレーニングをする仕組みとなっている。また各地域のワイン製造者組合の上部団体としてニュージー

ランド製造者協会が存在し、世界に向けてマーケティングを行っている（世界各地でイベントを開催し、高値での取引を実現してくれている）。

マーケティングだけでなく、ブティック産業（家族経営者）にとって大事なことは自分たちのオリジナル商品が賞を取ること。

レイジードッグワイナリーで販売されている商品

ニュージーランドでは、パーカーズシステムというワインの資格者による査定システムがあり、年間３万人がマスターと呼ばれる資格者を受け、５千人程度の合格者のうち、国内には５名がおり、ワインの査定を行っている。

そこで金、銀、銅賞を獲得することが大きく影響してくる。

４　ワイン産業における課題

ニュージーランドは長期的に投資、経営することは苦手で、すぐリターンを求めるため、ファイナンス（お金、資金力）に関しては課題。

ブドウに適した環境条件について語るクリス氏

セントラルオタゴは都市部から離れているため、労働力不足は課題。

緯度が北海道の稚内と同じくらいで寒い。ブドウには霜が大敵。また霜から始まり、病気、害虫の心配が５ヶ月間続く。

５　主な質疑応答

（質問）　20％が自家製、80％が販売と言っていたが、値段は？

（回答）　20％は自分の所で製造し、80％はブドウのままで売っている。

近年ニュージーランドのワインの人気が上昇し、大手企業からの需要が増えたためコンスタントに収入になる。ブドウであればその年に収入になるが、ワインでは寝かせなければならない。ピノノワールは18ヶ月、白ワインなら1年もかからないが、いずれにしろ投資に対するリスクが大きい。

（質問）　新しい芽が伸びる時、肥料を使うと早く伸びるが、オーガニックでは成長のステージを見越してやるのでは？

（回答）　（オーガニックでは）確かに遅くなっている。
オーガニックは今、流行りの哲学という考え方でもあり、ダイアナ氏のマーケティングではお客様はオーガニックには注目されるが、それ以上にどこで作られているのか、地域性が注目されている。

（質問）　それぞれ商品の品質の維持はどのように行っているのか？

（回答）　ワインを査定する資格者がいる。年間３万人受けて５千人が受かっているが、ニュージーランドには５人しかいない。
彼らが査定して、簡単に言うと、金、銀、銅をつける。

６　まとめ

ワイナリー個々の力でマーケティング、販売を行うのではなく、地域単位で取り組みを行っているのが特徴であった。地域のブランディング、国単位のブランディングで小ロットでも収益性の高い商売が実現するという理想的な状態を作り出していた。

ただし、大企業への生のブドウの納入による経営の安定化の点を考えると、ワイン生産だけによる経営も難しい可能性があり、日本における経営において大企業の役割を何が担ってくれるのかを検討する必要があるのではないか。

レイジードッグ：（羊を追いかけない）怠惰な犬

その他、病害虫、霜等気象条件によるリスクは日本とさほど変わりは無いと思われる。

ブドウ畑にてダイアナ氏とクリス氏を囲んで

5　ミルフォードサウンド及びリアルジャーニー社

・ 調査日　平成 28 年 11 月 13 日（日）
・ 調査先　フィヨルドランド国立公園
　　（ニュージーランド・ミルフォードサウンド）
・ 説明者　リアルジャーニー社
　　オペレーション部門責任者　ポール・ノリス
　　(Paul Norris)

遠藤　行洋

1　世界遺産ミルフォードサウンドの概要

ミルフォードサウンドは、ニュージーランド南島西海岸にある世界遺産です。200 万年～１万 5000 年前、悠久の時をかけて氷河が削ったフィヨルドです。タスマン海に面した海岸線に連なる大小 14 のフィヨルドの中で最も有名です。サウンドとは、英語で「入り江」という意味ですが、発見当時、地理や言葉の知識がなかったため「サウンド」と名付けられました。

ミルフォードサウンドの絶景

先住民族マオリの伝説によれば、１万 5000 年前の活発な氷河活動によってできたフィヨルドの複雑な地形は、神と崇められていたトゥテ・ラキファノアという巨人が斧を使って刻んだものということです。まさに、氷河が作りあげた彫刻です。

濃い色の深い海からほぼ垂直に突き出す崖の上にはいくつもの峰が並びます。晴れの日も雨の日もそれぞれに美しく、特に雨の後の滝は水かさが増して、雄大な風景をいっそう迫力あるものにするそうです。

私たち調査団は、宿泊地のクィーンズタウンから日帰りでミルフォードサウンドを訪れました。直線距離でわずか 40 キロメートルですが、道路がないため、迂回してバスで５時間かけて向かいます。今後も、道路を整備する予定はないそうです。山を削ったり、トンネルを掘ったりしてまでインフラを整備しないのです。自然保護は徹底しています。

ミルフォードサウンドの変化に富んだ景観を楽しむには、大型船によるクルーズが最適です。私たちが乗船したモナーク号は、2002 年に、皇太子さま雅

子さまもお乗りになったそうです。乗船料金は80ＮＺドル（約6,500円）。午後１時45分、１時間40分の湾内クルーズに、いざ出航です。標高1,692ｍのマイターピークの雄姿、豪快に落下するボーウェン滝、岩場で休息するアザラシの姿など、瞬きする間も惜しくなる感動的な景色の連続でした。

このミルフォードサウンドの観光客は、５年前は37万5000人でしたが、昨年は57万人まで増加しました。このペースで増加すると、５年後には、100 万人を突破する見込みです。ミルフォードサウンド観光の拠点となるクィーンズタウン空港発着の国際便も大幅に増加し、現在、週35便が就航しています。ツーリズムと持続可能な発展とのバランスが重要な課題となってきています。

今回乗船したモナーク号

２　リアルジャーニー社の概要

リアルジャーニー社は、1954年、観光業と環境保全の先駆者、レズ＆オリーブ・ハッチンスが創設した会社です。1970年から観光クルーズ船事業を開始し急速に事業を拡大してきました。

環境を大切にし、おもてなしの心をもって案内するという創設者の意向は、今も受け継がれています。ニュージーランドを代表する観光会社として、ミルフォードサウンドのクルーズをはじめ、クィーンズタウンなどで各種ツアーを運営しています。バスは50台、船舶は23隻保有しています。年商は8000万ＮＺドル(約65億6000万円)、経常利益は150万ＮＺドル（約１億2300万円)。社員は450人です。繁忙期には1,000人を超えるアルバイトスタッフを雇用しています。スタッフは、美しい景観に恵まれた大自然のすばらしさを、旅する人々と分かち合うという、シンプルながら創設当時から変わらぬ気概をもって日々業務にあたっています。

筆者とポール・ノリス氏

３　環境保全への取り組み

リアルジャーニー社は、創業以来、環境保全とともに歩んでいます。この地に受け継がれてきた大自然を守る立場にあることを自認し、環境保護に取り組んでいます。

社の理念の基盤には環境への熱意があります。環境保全省や地域社会とも密接な協力関係を築く一方で、生態系の保全や希少種の個体数回復プログラム、清掃プロジェクトなど、様々な活動を現物支給や資金提供により援助しており、ニュージーランド観光業協会より環境保全活動賞も受賞しています。

通訳を通して説明するポール・ノリス氏

また、環境基金も設けています。ツアー参加者１名につき１ＮＺドル（約 82 円）を環境保全活動に充てています。年間の貢献額は５万ＮＺドル（約 410 万円）以上になっています。主な支援対象には、イルカ研究、希少種の野鳥の保護活動、遊歩道と看板の整備、キャンプなどアウトドア活動を通じた教育などがあります。

近年では、環境保全省と連携した環境保護チャリティ活動に力を入れています。収益の一部を、在来種の天敵となる外来種の駆除対策整備に充当しています。キィウィなどクーパー島固有の絶滅危惧種の保護が最終目標です。

さらに、廃棄物を最小限に抑え、リサイクルを推奨しています。ピクニックランチには、生物分解可能なプラスチック容器を使用し、船上で使用するナプキンは漂白剤不使用でリサイクル可能なものにしています。

資料に目を通しながら熱心に説明を聞く団員

快適で山岳道路走行中の眺めも堪能できるバスの導入や、船舶の塗料も環境に優しい高品質のものを選択するなど、環境負荷の軽減に努めています。

4　主な質疑応答

（質問）　グループ企業全体の年間売上高はどのくらいですか。

（回答）　売上高は年間 8000 万ＮＺドル（約 65 億 6000 万円）で、経常利益は 150 万ＮＺドル（約１億 2300 万円）です。

（質問）　従業員の構成はどうなっていますか

（回答）　従業員総数は 450 名で、うち 75％がニュージーランド国籍です。その他の従業員は 13 の国籍で構成されています。これに加えて、1,000 名のシーズンワーカーが従事しています。

ポール・ノリス氏に質問する筆者

5　まとめ

リアルジャーニー社は、「観光」と「環境」を両立させている理想的な企業です。この美しい大自然のなかで仕事ができることの喜びと感謝の気持ちが伝わってきます。環境を守ることも、会社としての責任と使命だと認識しています。売上げに対して利益が少ないのは、儲けた分は自然保護に充てているからです。

今のペースだと、５年後には、年間観光客は 100 万人を超えるそうです。「入場制限」も考慮しているそうです。企業としての売上げアップより、環境保護を最優先しているからです。

本県も、富士山や駿河湾など世界基準の資源があります。観光客が増えることはありがたいことですが、一度失われた環境を取り戻すことは容易ではありません。「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟した駿河湾も、海底は、ごみだらけです。

美しい自然環境は、私たち郷土の宝です。リアルジャーニー社のような取り組みを見習い、美しい“ふじのくに”を後世まで守り続けることが、私たちの責務だと再認識しました。

モナーク号の乗降場にてポール・ノリス氏を囲んで

6　クィーンズタウン・トレイル・トラスト

高田　泰久　　曳田　卓

・ 調査日　平成 28 年 11 月 14 日（月）
・ 調査先　クィーンズタウン・トレイル・トラスト
（ニュージーランド・クィーンズタウン）
・ 説明者　上級主任
マンディー・ケネディ
（Mandy Kennedy）

ワカティプ湖畔にあるヒルトンホテルにおいて、マンディー氏から、クィーンズタウン・トレイルについて説明を受けた。

1　クィーンズタウンの概要

筆者とマンディー・ケネディ氏

クィーンズタウン（以下、ＱＴ）は、ニュージーランド（以下、ＮＺ）南島オタゴ地方の内陸部に位置する、風光明媚なワカティブ湖畔に面した町であり、地名は周囲の山々に囲まれた美しさが「ヴィクトリア女王にふさわしい」と名付けられたことに由来する。

また、町から車で 10 分ほどの郊外にはＱＴ空港があり、シドニーから約３時間のフライトで到着できる世界的に有名な観光保養地であり、高原の避暑地のようなたたずまいで、バラエティーに富んだ活動拠点になっている。夏にはパラグライディング、ゴルフ、トレッキング、ジェットボート、釣りなどが楽しめ、冬にはスキー、スノーボード、蒸気観光船、カジノでのゲーム、食事などを楽しむことができる。また、ＱＴはバンジージャンプの発祥地としても有名である。

2　クィーンズタウン・トレイルの現状

ＱＴは「南半球マウンテンバイク＆サイクリングのメッカ」として注目さ

れており、アドベンチャーキャピタルとして、いわゆる「トレイル」が整備され、レベルやジャンルを問わずサイクリングを楽しめる絶好の環境が整っている。

「トレイル」とは、登山道や林道などを意味し、場所の高低に関わらず、舗装されていない主に山などの自然の中を走るアウトドアスポーツであり、最近では日本でも専門誌が発売されるなど、国内でも人気のアクティビティとして老若男女に幅広く広がりを見せている。

こうした中、世界に名高いマウンテンバイクリゾートを目指し、ＱＴからアロータウン郊外にかけて、初級者から上級者まで楽しむことのできる「ＱＴトレイル」が整備されている。

マンディー・ケネディ氏による説明

３　クィーンズタウン・トレイル整備の経過

2002 年にクィーンズタウン市議会代表の提案で、ＮＰＯ団体ＱＴトラスト（以下、ＱＴＴ）が結成され、ＱＴ市議会事務局にその事務所を置いた。目的は地域住民の健康促進と自転車道の整備である。

トレイルコースでの実走体験に向かう筆者

2008 年のリーマンショック以降、ＮＺのキー首相は経済振興と雇用確保、観光振興を目的とした国内の自転車道整備に 1500 万ＮＺドルを予算計上した。

ＱＴＴは自転車道 126 キロメートルの整備計画を企画申請し、このＮＺ政府の予算の一部と環境保全省、地域のトラストなどから 600 万ＮＺドルの資金を集めた。

トレイルコースはＮＺ全体で 22 カ所あるが、政府から資金援助を受けるに

当たり、当初の計画申請段階における想定利用者数は５年間で３万 5000 人を見込んでいたが、実際には４年間で 100 万人を突破し、ＱＴもそのうちの１つとして、冒頭述べたような地理的条件が功を奏し年間 300 万人の観光客が来訪した。

ちなみに、利用者は米、独、英の観光客だけでその６割を占め、ＮＺ国内の利用者を上回った。その効果はＮＺ全体で 1400 万ＮＺドルの経済効果を生みだした。このことは、サイクリングそのものが、一部の人たちのものでなく、観光振興にも大いに役立ったことを証明することになった。しかし、その背景にはＱＴＴを含め合計８つの地域のトラストの協力がなければ出来なかった。つまり地域のコミュニティーのサポートが大きかった。

４　クィーンズタウン・トレイル整備の今後

2015 年には、2025 年までの向こう 10 年間で、ＱＴ内の 47 の組織と提携し、トレイルの発展、維持、推進を含めた計画が決められた。その内容はカワウラ川の土砂すべりの修繕や、新たな山側のトレイルの新設、サンシャイン港への７マイルコースの新設など８つのプロジェクトである。

さらに、ＱＴでは、2016 年から 2018 年にかけて、観光目的だけでなくＱＴの住民の通勤の足としての整備計画も進められている。

レンタル自転車でコースを体験する団員

５　主な質疑応答

（質問）　ＱＴは何故、サイクリングが盛んなのか。

（回答）　ＱＴは人口比率で若者が多く、移動手段として自転車が日常的に使われている。

（質問）　将来、湖畔周辺も含め、ＱＴ郊外の山々や、車で１時間もかかるようなワイナリーまでのトレイルの整備計画があり、町全体が協力しているように見えるが、その通りか。

（回答）　説明でも述べた通り、ＱＴにある 47 の組織が協力してくれている。この整備計画は、コミュニティーが重要な役割を果たしており、そのサポートが無ければ、実現は困難であった。

６　まとめ

今回、我々も全員で現地ワカティプ湖周辺をマウンテンバイクで 30 分ほど走破してみた。湖に面した上り下りのある細い道のサイクリングはきつかったが、風光明媚な景色がその疲れを癒してくれた。そして、30 分ほどのサイクリングは爽快感があり、健康にも良いことを実感した。

トレイルコースからワカティプ湖畔を望む

本県では太平洋を見ながらのサイクリングロードの整備が進んでいることと承知しているが、世界遺産富士山や数多くの景勝地、温泉等を初めとした全国屈指のサイクリング環境を生かした県内周遊モデルコースの確立と提案など、観光誘客の新たな視点の開拓とサイクルツーリズムの受入体制のさらなる充実化に取り組むとともに、県民の健康面からもこのような手軽に楽しめるレジャーの普及も今後の政策に盛り込む必要があると考える。

マウンテンバイクとともにマンディー・ケネディ氏を囲んで

7　ディスティネーション・クィーンズタウン

・ 調査日　平成 28 年 11 月 14 日（月）
・ 調査先　ディスティネーション・クィーンズタウン
　　（ニュージーランド・クィーンズタウン）
・ 説明者　教育部門責任者
　　アーロン・ハルテッド
　　（Aaron Halstead）

鳥澤　由克

クィーンズタウンの落ち着いた雰囲気の街並みを通り、中心街にある本日の視察先団体事務所の建物に向かった。

説明者のハルテッド氏の出迎えを受け説明会場へと案内された。会場に入り各団員とハルテッド氏との名刺交換及び自己紹介が行なわれ、続いて小楠団長からの挨拶があった。冒頭説明者のハルテッド氏より昨年日本を訪れた際、冬季に富士山頂への登山をしたことが、スマホの映像と共に報告された。その後、説明に入った。

1　ニュージーランドの概要

正式名称は英語で New Zealand（ニュージーランド）、マオリ語でアオテアロア。略称は、ＮＺ。アオテアロアは、「白く長い雲（のたなびく地）」という意味。元々は、北島のみを指す語であり、かつてはニュージーランド全体を指す語として英語の New Zealand を音訳した Niu Tireni が使われていた。

美しいニュージーランドの原風景

ニュージーランドの面積は、268,680 ㎢である。多民族国家であり人口の約 74％がヨーロッパ系、先住民族マオリ人が約 14％となっている。ニュージーランド列島は環太平洋造山帯に属し、北島と南島の２つの主要な島と多くの小さな島々で構成される。北島と南島の間には、クック海峡がある。気候はほぼ全土が西海岸性気候に含まれ、夏は涼しく１年を通じて温暖な気候であるが、北島・南島ともに多くのスキー場があり、南半球の地理的、気候的な条件にも恵まれ、太古から大陸より切り離され孤立したため独特の生態系が形成された。

豊かな国土と地形から農業が盛ん。特に酪農、畜産が盛んに行われ、およそ３割の輸出品目は農産品で占められる。近年では、国際市場での価格上昇を受け乳製品の輸出が好調。

年間 260 万人以上の旅行者が目的とする豊かな自然があり世界的に有名な観光・保養地を抱える観光立国でもある。

２　地元経済を取り巻く環境についての説明

クィーンズタウンを単なる通過地点とせず長く滞在し地元経済が潤う施策を検討しているが、課題もある。インフラ整備が重要であるが、小さな町であったためその整備が追いつかない状況下にある。また、混雑緩和のための公共交通路線は１つしかない。インフラ整備と改善のための長期計画を中央政府の協力により実現し、道路の拡幅と中央を歩行者専用道路として整備計画の促進を図りたい。

来訪者の急激な増加のためホテル等の宿泊施設の不足に加えて、提供するサービスの質向上と提供体制が間に合わない状況にある。

長期にわたり、大勢の人達を収容するコンベンションセンターのようなものがなく、観光目的だけでなく住民にも使用できる多目的施設の誘致を推進している。

筆者とアーロン・ハルテッド氏

近年の社会状況の急変による物価上昇、生活費の高騰により若者が生活しにくくなり、市内における観光業を含む若手の労働従事者の確保が困難になっている。現在のクィーンズタウンは、不動産バブル状況にあるため不動産価格は、60％以上高騰しており加速度的に住みたい人が増加しているため余計に、住宅事情の悪化を招いている。オークランドも観光発展を遂げているため相互作用によるバブルの加速となっている。そのために、近隣経済圏間の経済調整が難しい状況下にあり、加えてトランプ次期大統領決定に向かいアメリカからのニュージーランドへの移住定住を含めた、様々な問い合わせが 250％増加している。

クィーンズタウンに質の高い長期滞在者確保に向け、空からの誘客確保のため、航空機の夜間離着陸の拡大を検討しており、本年度よりナイトフライトが可能となった。

クィーンズタウン空港は、急速に発展し 15 年前は２～３便のフライトのみであったが、現在は１日 48 便となり年間 170 万人が利用するまでになった。夜間飛行に対する苦情等影響も出ているが、この町は完全に観光立地による町づくりのために、観光事業に携わる人々が多く銀行・弁護士・企業・地域住民が協調して問題解決に取り組んでいる。現在のような過剰な観光開発・自然破壊・移住者によるトラブル等これ以上の環境変化を望まず、10 年前の元の小さな静かな町の佇まいや従来の生活の維持を望む声も強い。

しかし、同時に観光ビジネスをしている人々も多く町の発展を望む声もまた同様にして多い。このことは、クィーンズタウンだけでなくニュージーランド全体における双方両立を実現するための大きな課題と言える。

３　組織の状況

地域の観光振興・促進を目的に設立され、ニュージーランド全国に 30 ある観光機関の１つとしてクィーンズタウン観光のため独立した窓口としている。究極の目的としているのは、南半球における一番の観光目的地としての地位を確立する事にあるとのことであった。

興味深く説明を聞く調査団

900 のそれぞれの観光会員企業をメンバー構成として職員数もピーク時には 15 名から 30 名に増員しそのマーケティングとプロモーションをしている。運営資金的には商業目的の賦課金による資金援助を受け活動資金として運用されている。

４　訪問者は何を期待しているか

調査によるとクィーンズタウンに訪れる最大の目的は

- 美しい自然
- ゆったりとした場所
- アドベンチャー体験
- 汚染されていないクリーンな環境と温泉
- 観光客に優しい人と地域性
- 安全な地域

などである。日常の生活からの脱却と雄大で美しい自然を求めて世界各国から多くの観光客が訪れる。

5　クィーンズタウンの今日の現状

・クィーンズタウンに世界各国から様々な人々に訪れてもらえるように努力している。クィーンズタウンは、日本と同じように四季があるので各季節に応じたプロモーションを行う。
・人口２万人に対して年間 290 万人の訪問者があり平均宿泊者数は 2.67 泊。
・ニュージーランドの最高の訪問先として訪問者の貢献は 200 万ＮＺドル。
・来訪者の主な目的はアウトドア、アドベンチャー体験（国立公園、釣り、キャンプ、自転車、ハイキング）。
・ゴルフ、ワインも有名でありレストランとの共同プランニングにも力を入れている。
・平地は雪が少なく、スキー場は山間部にありプランの多様性があり冬休みを組み合わせたプランニングが好評となっている。来る前に格安パッケージを事前申し込みで利用することが多い。奥さんはショッピング、子供はアクティビティー等を利用している。金曜日から月曜日にかけての週末プランは人気があり、親が１日休めば家族全員で休日を過ごすことができるメリットが要因だと思う。

質問する筆者

・日本人の滞在期間は短く、アメリカ人は長くハンティングやヘリコプターでの遊覧飛行等高額な旅行代金を支払うなど、経済効果が大きい。中国人観光客は、宿泊・食事・買物等の目的により年々増加傾向にある。

6　クィーンズタウン訪問者の人気トップ 12

①観光 55%、②スカイゴンドラと眺望 52%、③ウォーキング、ハイキング、登山、トレッキング 36%、④レストラン、カフェバー、ナイトクラブ 35%、⑤スキー、雪と氷のアクティビティー25%、⑥究極スポーツ（バンジージャンプ、スカイダイビング）23%、⑦湖のクルージングまたはボート体験 22%、⑧川と湖のアドベンチャー体験 22%、⑨探検 22%、⑩アロータウン訪問 22%、⑪買物 21%、⑫フィヨルドランド（ミルフォードサウンド）観光 19%

7　主な質疑応答

（質問）　これからの観光施策をどのように展開するか。
（回答）　10 年～20 年先の計画も立案され進展しており 20 年計画が本年度において数値的目標が達成となってしまったので新たな局面を迎えて

いる。一般観光事業の成功に伴い海外投資にも目を向けていきたい。私も富士山に登ったが、保全と観光の両立を目指したい。

（質問）　クィーンズタウンを含む観光の情報を直接教えてくれる所はないか。
（回答）　インフォメーションセンターが対応している。現在増加している中国の来訪者に対しては専用サイトがありそれを活用している。

（質問）　ニュージーランドで発災した地震の風評被害はないのか。
（回答）　風評被害は出ている。当期４万人の来訪者を計画していたが、キャンセルが続いているため経済面に影響がでる可能性があるので懸念している。火山・地震等自然災害の対策など観光事業と同様に防災面でも努力が必要と考えている。

８　まとめ

今回のクィーンズタウンの視察を通じて、本県が推進する観光政策を比較検討して行う上で、世界的な視野と基準を学ぶ貴重な機会となった。わが県は、世界文化資産の富士山や世界で最も美しい湾の登録をした伊豆半島、恵まれた気候に育まれた農畜産物・食材、歴史ある建造物など多彩で、人を引き付ける我が国有数の観光資源が存在する。これらの観光資源を有効活用するのみでなく、訪れる来訪者すべてに対しての本県観光の受け入れる体制づくりとともに世界基準に高めていく必要がある。このことは、これからの観光事業の果たすべき役割がますます重要となってくる事を意味し努力の積み重ねが不可欠であると感じた。

クィーンズタウンが行っている組織体制から、複数の市町、市町の観光協会、ホテル、交通業者、商工団体、農業団体、地域関係団体など多くの関係者等の組織編成の重要性と協調性の方向性を学ぶことができた。加えて観光振興の意義の理解と日本人が大切にしてきた“おもてなし”に代表される受け入れる意識の醸成を促進していかなければならない意味についても再認識した。観光と保全との相関関係において観光資源を有効活用し、次世代に継承し、地域住民が愛着と誇りをもって生活できる地域社会の形成こそが重要となる事を感じた。

アーロン・ハルテッド氏を囲んで